

新刊紹介

アダム・スミスの会 編『アダム・スミスの味』
大河内 一 男

山 崎 怜

スミスの放心癖は有名で、幼少時代から独りごとのくせがあり、長じてはオクスフォード入学のさい、入寮さいしょの夕食テーブルのまえて巨大な牛肉片をみて放心状態におちいり、主著『国富論』の執筆中には散歩と称してガウンをきて15マイルも歩いたり、エディンバラ関税委員時代には税関守衛の捧げつつに、自分もついステッキで捧げ銃をし、書類の署名には、すぐまえの人の署名をそっくり写して部下をはらはらさせるといったぐあいだから、晩年の放心状態での散歩はもはやエディンバラ・ハイストリートの名物であった。早朝に化粧着をきこんでの延々たる長距離散歩とぶつぶつ何やらつぶやく独りごとは、スミスその人を知らぬ魚場の女にとっては、狂人が付添なしてあてもなくさまよっているとしかみえなかったといわれ、またみずからもその会員だった美食クラブでのさる日、議論に夢中になって放心し、パンにバターをつけて手くるめ、それをティー・ポットにいれて湯をそそぎ、ひと口飲んで、さすがのかれも「うまれていままで、こんなにまずいお茶はのんだことがない」と叫び、またあるパーティーの夜には、かの作家サー・ウォルター・スコットによれば、1婦人が、着席をすすめるのに甘党のスミスは一向に知らぬ顔でテーブルの周囲をぐるぐる歩きまわり、ときに立ちどまっては桌上的砂糖壺の角砂糖をつまんで口にいれるので「ついにたまりかねたその尊敬すべき老嬢をして、かれの不経済な掠奪からそれを確保する唯一の方法として、その砂糖壺を自分の膝の上におくのやむなきにいらしめて、かのじょをひどくこまらせたことはわれわれの到底忘れがたいところである。あいもかわらぬ砂糖を口の中でモグモグさせているかれの様子ときたら蓋し形容を絶したものだ。だったそうだから、わたしはかねがねスミスが生涯独身でとおしたこともかかる放心ぶりへの女性たちの善良な警戒心をふくむのではないかとひそかにおもうのだが、それはさておき、かれの徹底した放心癖はわれわれにさまざまのおもいをよびおこすだろう。

第1に、そうした放心はかれにおける精神の集中度の異常さをむしろ示すかも知れない。ひろくかつふかい仕事をなしとげた人物が世事にうとく小児にひとしい仕草をした

り、奇行の持主だったことは歴史上にその事例は無数であり、スミスもまたその珍らしくもないひとりだったのかも知れない。それと同時に（それを否定するのではなく）、第2にどうもスミスには集中の逆の表現にはベツクリあてはまらぬ純粹放心というものがありはしないか。この放心は、集中の密度のたかさというよりも、既成の衣裳にたよらない純粹の眼、くもりやけがれの無い原点としての眼、なにかで洗われたような眼ともいべきものを、かれにあてたのではないか。それは、かならずしも鋭角にするどいものとはいえないが、なにかひどく原生的なたしかさのみぬく放心なのである。そのうえ、さらにかれには純粹放心のなかの純粹放心、超純粹放心ともおもわれる逍遙的放心があって、『国富論』を通読すれば話は経済から政治へ、政治から教育へ、教育から軍事へ、あるいは、ロシアからアメリカ、フランスからギリシャへとつぎからつぎへ、時空をあまがけるし、内容もまた健康法、美人論、その他ありとあらゆる領域とカテゴリをふくみ、それらは一見するとなんの必要があつてのべられたのかが不可解なかんじすらあたえるのだから、性急で頭のよい凝縮性の強烈な人間（非放心的人物）のとともついていきかねる冗漫さである。ところが、ここがじつはかんじんなスミスのスミスたる所以で、表見上はなんのつながりもなさそうな時空の果てに属する異種の事象が一定の脈絡をもつてつながれる、つまり、それぞれのカテゴリ自体の説明ないしは個別分析ではなく（AならA、BならBの個別分析でなく）、AとBとCとをつなぐ媒介の論理を網の目とする総合認識——スミスでは哲学とは自然を連結する原理の学 the science of the connecting principles of nature であり、諸カテゴリのあいだに鎖をみいだして直接にはむすびつきえない2物間の移行をとらえ、異常な事物にたいする驚異を想像の容易な移行 easy movement of imagination にうつすこと（『哲学論文集』）であり、自然哲学は自然的自然の、社会哲学（道徳哲学）は社会的自然の、それぞれ連結原理または鎖の輪を発見する——をおさえるには、むすびつきえないものを常識的に、また凝縮秀才的にきりすてたりできない。つきあうもの、みえるものすべてをひょうひょう悠然、つかずはなれず、とりいれて知らぬ顔をしなければならぬ。

それをスミスはあらぬところで、みずから自伝的にもわぬ告白をして哲学といい、哲学者となづけた。複雑な技術の利用をはじめてももいついた者は「おそらくどのような種類の労働者でもなく、哲学者か、たんなる思索家だったであろう。これらの人たちのある者は、何かをするのではなく、あらゆるものを観察することを職業とし、そしてそれによって、まったく対立的でとくはなれた事物の力を結合することができる。すでに知られ

ていて、またすでにひとつの特定の目的に適用された諸力を、もっとも有利な方法で使用することは、才能ある技術家の能力をこえるものではない。しかし、全然知られていず、また、類似のいかなる目的にもこれまで使用されていなかった、あたらしい力の使用をおもいつくのは、たんなる技術家が生まれながらにもっているよりも、広汎な思考と観察を有する人々にのみ、なしうることである。ある技術家がそのような発見をするならば、かれはそれによって、自分が表面上の職業は何であろうと、たんなる技術家ではなくてほんとうの哲学者であることを示すのである。ほんとうの哲学者だけが蒸気機関を発明したのであり、以前にはかんがえもつかなかった自然力をつかって大きな結果をうみだすことを考案したので（『国富論草稿』）と。哲学者の眼が観察者の眼であり、公平な第3者のそれであり、したがって「同感」の眼であることは、すでに説明を要しないとすれば、社会的自然における鎖の輪の主體的側面がすなわち「同感」そのものであり、その客體的側面が目的と手段との「転倒法則」であり、これはスミスみずからが哲学者であることを自負するとともに、蒸気機関の発明者を、じつはスコットランド人ウォットの名を秘したうえて、例にとって哲学者→同感→スコットランド人の眼をだぶらせた、まことに巧妙な放心ぶり——「作用原因」たる超純粋放心と「目的原因」たる鎖の輪の発見——というほかはないし、この観察者が社会的分業労働の一翼にならう実践性を、いいかえれば行為者の感情をみずからの成立契機としてもつものとされ、したがって観察者と行為者との織りなす感情の社会的形成ないしは動的交流かんけいにおいてこそ成立する感情を「同感」とするなら、この放心こそはスミスにおける主客統一、理論（認識）と実践の統一、「発見」と「発明」と「工夫」の（アーティストとフィロソファーの）統一の、さらにはいまのべた高次の主客の一致（「同感」という主體的側面と「転倒法則」の客體的側面の統一）——後者は現世にかぎっていえば、行為者にはまったくみえずもっぱら哲学者のみの仕事であり、前者は個々の行為者（かれらは同時に交互に観察者たりうる）間になりたちうるが最終には哲学者に窮極の基盤をおくというかたちで——の根拠なのである。だから、スミスがあるときは天文学や物理学を、またあるときは言語起源論——ことばは自然現象の「結合原理」をあらわす鎖であり、その鎖をかれの歴史意識によって追求したものがこれである——や文体論——これもまたこの鎖にふさわしい自然な文章を探究するもので自然的秩序にしたがう文体を讚美し大げさな虚飾を批判する——やをのらりくらりとうまずたゆまず、本題から一見横道へ、また本論へと、何をいいたいかを凝縮的にのべないで筆をながしていくのは、たったひとつのテーマ、鎖の発見のためだった。

ところでスミスの放心をめぐって、わたしを魅了してやまぬのは、むしろ、放心癖のいくつかの例からも知れるように、およそ自己の損得に無関心な、また伶俐俊敏とはさらさらいえぬようなスミスが、利己心（自愛心）を中核とする経済人的経済学の創始者といわれる点で、かりにこれを第4の放心としての、利己心的放心となづけよう。だれでも偉大な人は多少はすべて奇人であろうが、自利心の経済学者がなにやら気味のわるい独りごとの性癖をもつということは、留意にあたいする。ここにこそアダム・スミスもんだいの真実のふくらみがある。利己心それ自体の発見に独自性があるのではなく、その社会的認がいかにして可能か、にこそかれの特色があるのだとするなら、あの強度の放心癖と利己心のむつびつきにこそスミスの秘密があったはずだし、また、ここから、ひとつは超純粹放心のもんだいと、ふたつには利己心を流通上のそれ（詐欺瞞着による富）とせず、生産上のそれ（労働による富）におきかえるスミスの独自性がでてくるだろう。

スミスの味の素がかれの放心癖にあるとするのは、粹狂なわたしの推理であるが、ともかく、粹人を知るにはなにより粹な方法をもってしなければならない。この本は、わが国で出版されたおびたしいスミス文献のなかで、おそらく、もっとも粹狂なもののひとつである。

まず第1に、この本のなかには、スミスの蔵書のタイトルをしらべあげる世界的な仕事があるかとおもえば、スミスを巡礼した紀行文があり、かとおもうと日本に到来した蔵書の数々につき、あるものは文庫として、あるものは1冊の手がきの本につき、購入の経路から現在の保管状態にいたる、記録しうるものはすべて記述したものから、先駆的邦訳者の現存の方々、大内兵衛・竹内謙二両教授の邦訳苦心談があり、またとくにこの本のタイトルとなった竹内教授の愉快的講演もあるし、なによりも第2にスミス肖像画のカラー・プリント（著書掲載としてはわが国さいしょのところみでおそらくスミス以外の社会学者をいっさい考慮してもカラー・プリントは前代未聞である）が美しいできばえて冒頭をかざっている。第3には、この本の企画・出版の事情があまりにスミスのためであって当世風でない。この本の内容のおおくはすでにものさされて10年以上を経過しているし、なによりもこの本が企画されてほぼ同様の期間がたつ。「眼から手へ」の今日、これはおよそ当世風ではない。スミスが書物をかくのに悠々たるもので、一向に急ぐ様子もなかったのは、放心癖のかれとしては当然だが、この本の執筆者もまたわたしからみれば、どうも放心状態にあるものらしい。なかには相当に重症のものもある。さすがに立派である。しかし、まだまだ、粹狂さのたりない面もある。たとえば、スミスの天文学や言語論や文章論

がとりあげられていないし、かれの芸術論（美術、音楽、演劇など）にも言及されていない。要するに『哲学論文集』の放心癖たる所以が無視されているふしがある。だが、それこそはこの本の放心度の異常さをものごとくたるともいえよう。重症もきままれりというべきか。

ここでこの本の味そのものをかこうとはおもわないし、また、できもしない。味は読者のひとりひとりが親しく味わうべきだろう。この本はそうした本である。

したがって、別のことをかく。『味』についておもいだす。かつて河上肇博士は『社会主義評論』（明治39年1月）を絶版にふし、『時勢之変』（明治44年3月）をかいた。後者には前者以来、博士とかんけいぶかかった足立北鷗がはしがきをよせた。「本書は河上学士の名著『社会主義評論』の後身也。否絶版せられたる該書の身代りなり。時勢之変もさる事乍ら、後書を以て前書に比すれば、其性質も内容も亦変れば換るものなり。前著は放胆的にて後者は小心的なり。書生論的感興は前書に存し、経世的見地は後者に在り。前者は人をして喝采せしめ、後著は人をして考慮せしむ。前者には音あり、後者には味あり。」

『味』は人をして「考慮」させ、経世家的たらしめるが、『音』は「喝采」させ「書生論的感興」をおこす。まことに現代は、拍手と書生論的興奮の本がおおく、「考慮」させる本はすくない。そして、なお、おもしろいのは、河上の後者の本での経世家風な河上と詩人的低徊趣味の河上との照応かんけい（この本の序言のさいごに「急げどもしばし憩うてこしかたの」云々の短歌をかかげたり、本文の途中で日記風の1文を挿入したり、巻末に「正に筆を擱くの刹那、一天搔き雲りて轟然たる声、遠くより来る。窓を披けば風雨俄に來り、枯葉飛んで天をおおう」などとかく低徊性）がいかに河上流の放心ぶりを示すのみか、この本の対象がいわば「人類文化史」ともいうべき叙述であることと、全スミス思想（自然史）との対応をも示して、気味わるいほどだ。「考慮」させるということですぐ想起されるのは、例の文芸クラブ会員パーナードの詩であって、ギボン、パーク、ポークラークはそれぞれ、簡潔な形式、雄弁、談話の手本だったのにかたいし、スミスは「いかにかんがえるべきか」（思惟）の手本であった。放心かんがえる味のかんれんは、卒直に『味』と銘うつこの書の「目的原因」たる味と「作用原因」たる味について、つきぬあこがれをよびおこすのである。

この本は翻訳とはいったいどうあるべきかについて、日本の近代化について、自然法の18世紀的形態についても、静かに真摯にかたりかける。なにもスミスだけをうりものにしていないわけではない。スミスの立つ背後に展開する人間の歴史を正視しようとしているに

すぎぬのだから、われわれもこの本をよみながら、スミスをみてみぬふりするぐらいの
 放心ぶり、執筆者のそれをこえる放心ぶりをもつべきであって、そうすれば、この本か
 ら、経済学や社会科学をまなぶことの哀歎を味わえるであろう。そしてこの紹介の1文が
 スミスの数おおい放心にみいだせない痴呆的放心ぶりを示していても、むりからぬことと
 してゆるして下さるにちがいないし、学問生産にとっていかに寛容と遊びが必要であるか
 をかんがえ、味わって下さるであろう。

この本の内容はつぎのとおりである。

はしがき

大河内一男

I

アダム・スミスの味

竹内謙二

『国富論』邦訳のころ

大内兵衛一
大竹内謙一

II

日本におけるアダム・スミス研究の諸段階

大河内一男
大田添京二

アダム・スミスの自然法

——イギリス18世紀中葉の社会思想の一齣——

大道安次郎

アダム・スミスにおける「人間」の問題

大河内一男

III

アダム・スミス巡礼

大河内一男

東大経済学部所蔵アダム・スミス蔵書について

矢内原忠雄

アダム・スミスの蔵書

水田洋

アダム・スミスの蔵書解題

1 W. トムソン『ヨーロッパ・アジア・および

アフリカ旅行記』2巻(1782年)について

出口勇蔵

2 S. Thomas, The British Negotiator について

大河内一男

3 羊皮紙・手書きの1本『ヴェネチア刑法』について

田添京二

附録

1 アダム・スミスの会主催講演会および研究会報告者、題名一覧

2 アダム・スミス著書(主要版次)全国所在一覧

3 トウキョウのアダム・スミス

口 絵 チャールズ・スミス作と伝えられるスミス肖像画

扉写真 タッシー作 スミスのレリーフ

(東京大学出版会・1965年6月刊・ii+328ページ・680円)